鮮やかな手つきでグレイの身体をひっくり返してシーツの上に押しつけた。
「俺の勝ちだぜ！　覚悟しろ」
「馬鹿なことを」
いつも飄々と落ち着いている男が、二人のときは子どものような一面を見せる。
どうしようもない男だな。
唇がほころぶ。ホークといるときは、自分がよく笑うことに気づいたのはいつのことだったか。
アイパッチを人差し指の腹でなぞる。ホークが自分でそれをむしり取った。
夜の海の瞳が近づいてきたから、眼を閉じた。
荒れた唇がそっと口づける。
荒っぽい海の男。粗野な振る舞いも多い。でも、グレイに触れる時はいつもやさしい。
裏稼業に身を置いていたせいか、年よりずっと老成しているようで。でも決して冷たいわけでなく。
――てめえ、ぶっ殺す！
グレイが戦闘不能の痛手を負った時に敵に向かって叫んだ声。
その言葉を聞いた瞬間、グレイは見えないふりをしていたものに気がついたのだった。

心を気どられることが怖くて、ホークの胸に顔を寄せた。灰色の髪の耳元を梳くと、ホークは唇を埋めた。黙ってそのまま押し倒す。
この瞬間はいつも鼓動が激しくなる。もう何度も夜を過ごしているのに、期待と緊張で頭が痺れてくる。
心臓が暴れる音が聞こえるのではないかとグレイは心配になった。
ホークはいつもの手順でグレイの身につけているものを剥ぎ取っていく。その途中、剥き出しの首すじに口づけされてグレイは小さな声を上げた。

気配を感じたような気がして、グレイは目が覚めた。
柔らかな朝の日差しが差し込んでいる。隣で小さくいびきが聞こえた。他に誰もいない。
気のせいか。
ホークの寝顔見て軽く笑いを漏らした。軽く右眼の傷痕を、瞼の上から指でなぞる。
朝の光の中ではずっとホークの側にいられるような気がする。いつも心のどこかに巣食う暗い予感が、夜明けにホークの寝顔を見ると消えるような気がする。
願うような気持ちで頬に唇を落とそうとした。
するとまた気配。いや違和感。既視感のある違和感。
顔を上げて、危うく声を上げかけた。

「ん？　どした、グレイ……」
異変を感じたのか、ホークも眠りから覚めた。まぶしそうにグレイの視線の先を見る。
「なんだ、てめえ！　なんで部屋の中に！」
オーガがテーブルの前にある椅子に腰掛けていた。いや、違う、オーガではなくてこれは昨日見た――。
鬼神刀の、刀鬼。
グレイはしばらく魔物を見ていた。混乱していた。
昨夜のあれは夢ではなかったのか。いや、そんなことより、これが夢でなかったらホークにどう説明すればいいのか――。
そいつはのんびりと声を発した。
「おはようさん。早起きじゃな」
グレイがなにか言う前に隣のホークが裸のまま寝台から飛び降りた。
立て掛けていたエスパーダ・ロペラを構える。そのまま電光石火で斬りかかった。
「ま、待て！」
素早い攻撃をすんでのところでかわし、刀鬼は降伏するように両手を上げた。
「落ち着いてくれ海賊。わしは鬼神刀の刀鬼だ。一度は貴様らに倒された。これ以上敵対するつもりはないぞ」
ホークは胡乱な眼で刀鬼を見ていたが、やがて少しだけ表情を和らげた。それでも得物は構えたままだ。
「刀鬼……なのか？」
しばらく無言で見た後、ホークは信じられないようにつぶやく。
「そうだ。往生際悪く、まだこの世に残っているらしい」
グレイはホークを抑えていた手を下ろした。
「往生際悪いとは失敬な」
「なんだ……いったいなにが起きてるんだ」
「俺にもわからない」
「わしはここにある鬼神刀の精だ」
異形の魔物はなぜか胸を張った。どこに威張る要素があるのか、よくわからない。
「ああ？　刀の精だ？　なんなんだてめえは。死んだら消えるんじゃねえのか」
ホークは視線を刀鬼に眼を離さず、細剣を鞘に戻した。
「うん、まあ、そのつもりだったんだがな。あんたらサルーイン倒すつもりなんだろう？　大変そうだから付き合ってやろうかな、と思ったわけだ。……それから、二人ともそんな格好していたら風邪をひくぞ」
グレイはあわてて床からシャツを拾い、袖を通した。ホークはひるまなかった。
「大きなお世話だ。この出歯亀野郎」
ホークは毒づいた。仁王立ちなので、隠すべきところが丸見えである。